

女性の地位向上と教育に生涯を賭した

今でこそ男女平等が声高に叫ばれていますが、まだ男尊女卑が根深かった明治時代、生涯を賭して女性の地位向上に尽力した、益城町出身の1人の女性がいます。

女子学院（東京都の中高一貫校）の初代院長や、禁酒・一夫一婦制を唱えた東京キリスト教婦人矯風会（後の日本キリスト教婦人矯風会）の初代会頭を務めた矢嶋楯子です。

楯子は、熊本女学校（現在は開新高等学校と合併）の校長を務めた三女・竹崎順子、言論家・徳富蘇峰と小説家・徳富蘆花の母である四女・徳富久子、横井小楠を妻として支えた五女・横井つせ子と共に「四賢婦人」としても知られています。

また、日本で初めて、女性から離婚届を出した人でもあります。

出生、結婚、離婚、上京

天保4年（1833年）、現在の益城町で、惣庄屋（地方の役人の一番上の位）・矢嶋直明の六女として1人の女兒が生を受けました。極端な男性社会にあつて度重なる女兒の誕生は歓迎されず、その子はお七夜を過ぎて名前を付けてもらえませんでした。そこで、10歳であつた順子が「かつ」と名付けました。

かつは25歳の時、横井小楠の弟子で小谷の武士・林七郎に嫁ぎました。3児をもうけましたが、竹を割つたような性格の夫との婚姻生活になじめず、結婚から10年後、赤ん坊を抱いて杉堂の実家に帰りました。そして、迎えに来た使いの者に、覚悟の証として切つた髪を渡しました。女性から離婚を切り出すことが許されない時代に、かつから離婚を申し出たのです。

その後、1年ごとに姉たちの婚家に身を寄せていました。が、明治新政府の役人となつた兄・源助が病に倒れ、その看病のために上京しました。その船中で、船のかじのよう

生きて行く決意を込め「楯子」と改名しました。

人生を変えた出会い

看病のいかにもあり、病が治つた源助の勧めで、楯子は教員伝習所（教師の養成機関）に通い、1年で卒業。桜川小学校の教師になり自立の道を歩き始めました。

学校での楯子は、厳しいけれど子どもたちを大切にしている教師でした。放課後には欠席している子の家を訪ね、女性にも教育が必要なことを父親に説きました。しかし、酒に溺れて借金をし、娘を働かせたり、娘を売るような父親と話し、世間が酒の害に気付かないことに心を痛めていました。

そのような中、キリスト教の宣教師であり日本の女子教育に心血を注いだミセス・ツルーと出会い、その人柄に惹かれ新栄女学校の教師となりました。楯子とツルーは、互いに尊敬し合い、共に日本女性の教育に心血を注いでいきました。また、この時期に楯子は、洗礼を受けクリスチャンとなっています。

矢嶋楯子の一生



天保4年（1833年）

4月24日、矢嶋家の六女として生まれる。10歳の三女・順子が「かつ」と名付ける。

安政5年（1858年）

小谷の武士・林七郎と結婚。

明治元年（1868年）

夫との間に3児をもうけるも、婚姻生活になじめず離婚。杉堂の実家に帰る。

明治5年（1872年）

東京で明治新政府の役人となつていた兄・源助の看病のため上京。この時に乗船した船のかじを見て「楯子」に改名。

明治6年（1873年）

桜川小学校の教師となる。

明治11年（1878年）

宣教師ミセス・ツルーと出会い、新栄女学校の教師になる。

明治12年（1879年）

洗礼を受けクリスチャンになる。

